2021 年度　第 50 回　北海道登山研究集会　「論文報告集（50 周年記念号）」、24～40 項
北海道勤労者山岳連盟／道央地区勤労者山岳連盟

北海道の登山文化を世界に発信する
―HokkaidoWilds.org を事例に―

トムソン ロバート ジョン
THOMSON Robert John[1]

キーワード：アドベンチャー、インバウンド登山客、欧米豪新、持続可能性、リスクコミュニケーション

1.　はじめに

1990 年代半ば以来、日本の「文化的輸出品」の輸出量は、他の輸出品よりもはるかに多いとされている(Green, 2015)。こういった日本文化の海外での魅力をより一層広げるために、2010 年に国が日本の特有の魅力である「食」、「アニメ」、「ポップカルチャー」、「新幹線」、「伝統工芸」などといった、「ソフト」な文化資産を積極的に海外にアピールし始め、2012 年から「クールジャパン戦略」を策定し現在まで展開を図っている(内閣府, 2019)。クールジャパンとは、「世界から「クール（かっこいい)」と捉えられる日本の「魅力」」(内閣府, n.d.)であり、上述のポップカルチャーなどに限らず、「世界の関心の変化を反映して無限に拡大していく可能性を秘め、様々な分野が対象となり得る」とされている(内閣府, n.d.)。クールジャパンを通して日本政府は、「世界の「共感」を得ることを通じ、日本のブランド力を高めるとともに、日本への愛情を有する外国人（日本ファン）を増やすことで、日本のソフトパワーを強化する」を目標としている(内閣府, n.d.)。

そこで、2018 年から北海道のアウトドア情報を英語で発信し続けている HokkaidoWilds.org では、限りなく北海道の登山文化をはじめ、自転車ツーリング、カヌーツーリングなどといった「北海道のハードな登山文化」も、クールジャパンが目指す「格好いい日本」への貢献として捉え、これからも北海道の登山文化にはグローバルステージにおいて魅力を輝かせる、大きな可能性を持っていると考えている。

1.1　北海道の登山文化とは

捉え方は様々だが、HokkaidoWilds.org は、「北海道登山文化」を以下のようにとらえている。

有形登山文化の要素：これは自然界を含む物理的な文化的要素である。北海道の山小屋、登山道、標識、登山口、温泉、行動食（おにぎり、スナック類など)、山での食事、登山中の服装、ギア、などなどです。これらは日本国内でも特色があり、外国人から見たら魅力がある（後述の議論に参照)。

無形登山文化の要素：これは、北海道の登山者の、山や登山に対する信念、価値観、マ

[1] HokkaidoWilds.org 編集長／北星学園大学文学部英文学科専任講師。Email: rob.thomson@hokusei.ac.jp

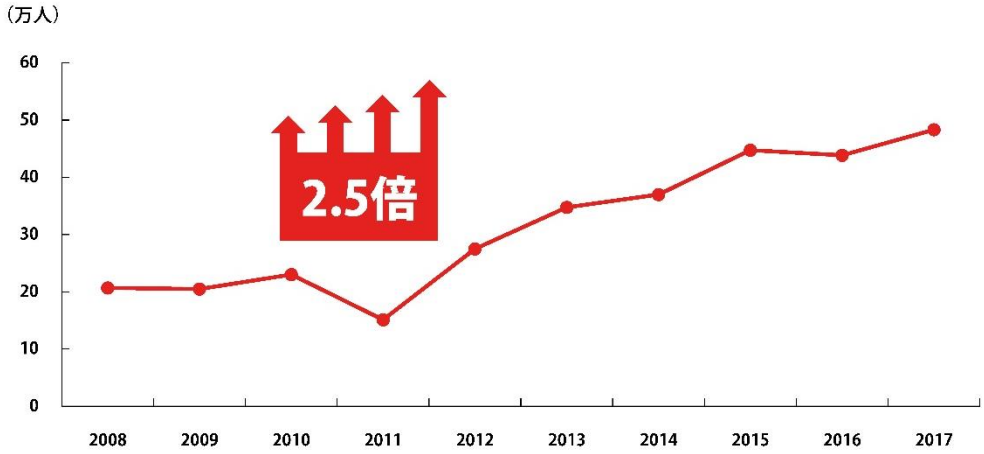


図 1　北海道外国人宿泊者数（欧米豪新、年間）

ナー、伝統、歴史、物語などである。HokkaidoWilds.org では、こうした北海道の無形登山文化も独特で、その「本格的さ」にかなりの魅力を感じていて、多くの外国人に知ってもらいたい。

1.2.　北海道というロケーションの魅力

日本のアドベンチャーツーリズムを代表する北海道は、ワイルドでハードな旅を求む欧米豪新のインバウンド・アドベンチャー・ツーリストには相当魅力的であり、冒険旅行者を含む欧米豪新のインバウンド旅行者の数がコロナ禍前には顕著に増えていて（図 1、北海道インバウンド研究会 (2018)）、コロナ禍が収束してからも増える見込みは十分あるため、北海道ならではの冒険に関する充実した情報を英語で発信する価値があると考えられる。

ここで強調したいのは、以下の議論の中で出てくる「アドベンチャー・ツーリスト」というのは、ある程度の野外経験を持っていて、ガイドなしでも安全に中級以上の登山、あるいはバックカントリースキーなどができるスキルや知識を持っている人を前提にしている。つまり、ガイド付きのちょっとした自然道でのウォーキング体験、流氷ウォーキング体験、ラフティングなどといった「ソフト」なアドベンチャーツーリズムではなく、団体旅行やパッケージツアーを利用しないで個人で海外旅行に行く FIT（fully independent traveler の略）アウトドア愛好者で、本格的な登山、自然界での活動などの「ハード」なアドベンチャートラベルを求む個人旅行者を指す。

そこでこうした本格的な登山をはじめとしたハードなアドベンチャートラベルと日本の文化的輸出、クールジャパン、ソフトパワーとどのような関係があるのだろうか。それは、アドベンチャートラベルの三要素である「自然」、「身体活動」、「文化」の中の、「文化」というところにあると私たち HokkaidoWilds.org は考えている。北海道大雪山の南方にある十勝岳を例にしよう。私の母国のニュージーランドでも、十勝岳のような火山帯は存在する。Tongariro Alpine Crossing（トンガリロ・アルパイン・クロッシング）という、8 時間ほどかかる登山道があって、世界遺産として承認されたほど美

しい場所である。したがって、多くの欧米豪のアドベンチャートラベラーがトンガリロ・アルパイン・クロッシングを縦走するためにニュージーランドを訪れている。しかし、トンガリロ・アルパイン・クロッシングには「自然」と「身体活動」が充実していても、「文化」というところでは、十勝岳を含んだ縦走には勝てない。なぜならば、日帰りの十勝岳温泉→富良野岳→十勝岳→十勝岳温泉という比較的に短い山行であっても、「日本」という、欧米豪新のトラベラーにとって「異文化」の要素に満ちているからである。登山口付近の温泉施設、日本語の書かれた登山道の標識や山頂標識、北海道の無人山小屋、すれ違う日本人の登山者やその登山者とのコミュニケーション、登山道へアクセスするための公共交通機関、このすべては濃密で有意義な異文化体験である。日本在住の登山者にとってごく普通の存在である登山口付近の自動販売機ですら、欧米豪新のトラベラーにとっては非常に興味深くて面白い（暖かい缶スープも買える？！）。欧米豪のトラベラーと同じ文化圏であるニュージーランドは、この意味では登山のデスティネーションとして全く勝負できない。

こうした意味では、アドベンチャートラベルの「文化」という要素では北海道の山岳地帯はかなり魅力があり、まさに日本の「クール」なイメージは北海道の登山文化にも潜んでいる。

本州でもそうした登山文化もあるのだとという人もいるかもしれない。ただし「自然」という意味でも、北海道の山岳地帯は日本国内外において特別な価値があると私たちが考えている。その価値は主に 1）北海道のパウダースノーと、2）北海道の自然界の多様性、という 2 点にあると考えている。

まずは北海道のパウダースノーだが、その知名度は世界的に広まっていて、特に上級者のスキーヤーにとって北海道はあこがれの場所の一つであることは間違いない。最近の SkiAsia.com の読者アンケートでは、「あなたが次に日本国内でスキー旅行をしたい場所はどこですか」という質問に対して、日本国内の数多くのスキーリゾートの中ではニセコが最も多く選ばれ（29.3%）、その次に人気だったのは白馬（13%）(SkiAsia.com, 2021)。きちんとしたデータは存在しないが、2015 年あたりからは北海道の冬山では欧米系の外国人の存在感が増す一方だった。

しかし北海道の山岳地帯の魅力はパウダースノーだけではない。北海道の山岳地帯を代表する大雪山国立公園でもコロナ禍前には外国人利用者は増加傾向にあった（経済産業省, 2018; 大雪山国立公園連絡協議会, 2020）。その理由の一つは、自然界の多様性だと私たちは考えている。アイスランドと同じような面積である北海道では、動物、野鳥、植生、山岳地帯の地質、ハードなアドベンチャーのフィールドの選択肢の多様さという点で北海道は特別な場所である。南北 400km、東西 500km という、広くてこぢんまりとした島で利尻島、知床半島、日高山脈、羊蹄山を含むニセコエリア、大雪山、そしてその間にある数えることのできない多くのフィールドの多彩さは、世界的にも例の少ない場所だと思っている。また北海道以南の日本と違っていて、気候がアドベンチャートラベラーにとっていい意味で厳しく、カムチャッカやシベリアなどと並ぶほど、訪れて感動するアドベンチャー感に

あふれている（図 2）。

ここで注意すべきなのは、北海道の自然界は特別な世界レベルの魅力があると言っても、「町に近い」という要素も強く、その長所短所を認めるべきだと思う。というのは、北海道には、世界的な基準で見たら「本当のウィルダーネス[2]」はないと言えるだろう。アラスカ、カムチャッカ、カナダ、ニュージーランドなどでは、登山道もない、1 週間歩いてもたどり着かない、小型飛行機を使わないとアクセスできない、といった場所が存在する。一方北海道は、地形の雄大さや自然界の多様さという長所がある一方、町が上記のウィルダーネスに近い場所があり、ほかのワールドクラスの自然界よりもはるかにアクセスしやすい。この点は世界でも数少ない魅力的な要素だと思う。大雪山のように、夏でもロープウェイ一本で森林限界を超えた本格的な高山トラバースができるのは世界的にみても珍しい。「本当のウィルダーネス」がないことは一見寂しいように思えるかもしれないが、一方北海道の「accessible wilderness（すぐそばのウィルダーネス）」は宝物である（図 3）。

このように、北海道というコンパクトな面積には世界的にも珍しい自然界の多様性があり、それに加えて「異文化」の要素も豊かなため、「北海道登山文化」は国が目指すソフトパワーの輸出に十二分に貢献でき、これからも発展していくと思われる。

2.　HokkaidoWilds.org について

HokkaidoWilds.org とは、北海道やその周辺のアウトドア情報（バックカントリースキー、夏登山、カヌー、自転車ツーリング）

図 2　北海道の自然界は日本国内外で特別だ

[2] Wilderness;無限の原生自然。

図 3　雄大で本格的な山岳地帯へのアクセスは忘れてはいけない重要な魅力

を英語で発信し、日本国内外の英語話者に十分な情報を提供し安全に北海道の素晴らしいアウトドアを楽しんでもらうという狙いで立ち上げた非営利ウェブサイトである。

まさに、文字通り北海道の登山文化や冒険文化を世界に輸出（発信）しているのである。

2.1. 立ち上げた経緯

北海道在住のニュージーランド人の私、トムソン・ロバートが 2018 年 11 月に任意団体「HokkaidoWilds.org」を立ち上げ、同時に同非営利ウェブサイトを公開した。きっかけは、私が 2017 年に富良野岳を登山していたある日のでき事であった。私と仲間は富良野岳を登っていて、登頂後に下山途中にある分岐で休憩をしていた。天気は濃霧で、小雨が降っていた。その時、イギリス人二人が現れ、私たちに道を聞いた。「十勝岳温泉はどちらですか」と。方向を指して、私は「地図はないか」と聞いたら、相手がポケットから雨水でちぎれかけた手書きの地図を取り出して、「宿泊施設の方が書いてくれた」と説明した。まともな情報源がないまま北海道で登山をしている外国人は何人いるのだろうかと、その時に強く疑問を持った。以前から自分の個人旅行ブログで北海道での冒険談や自分の過去の世界一周の旅の話を公開していたが、他の外国人がより安全に北海道が楽しめるように自分は何かできないかと、その時から考え始めた。

2.3.　公開するコンテンツ

HokkaidoWilds.org では、コンテンツの戦略として、道内の本格的なアウトドアに関して「情報エコシステム」を目指している（図 4）。3 柱の戦略で、1）Inspiration（写真などを通じて北海道に来たくなるようなコンテンツを提供）、2）Information（北海道に来て個人トラベラーが実際に自分で北

図 4　HokkaidoWilds.org のコンテンツ戦略、3 柱の「情報エコシステム」

海道で冒険できるようにルート情報や地形図などのコンテンツを提供)、3) Education（北海道の山でのマナー、安全情報などを含んだ、北海道のアウトドアについて学んでもらうコンテンツ）で成り立っている。

2021 年 8 月現在、HokkaidoWilds.org では道内のスキー登山ルート 114 本、夏登山ルート 82 本、自転車ツーリングルート 42 本、カヌールート 44 本、道内の山小屋 42 軒を英語で紹介してきて、利用者が自分のレベルに合ったルートが探せるようにウェブサイトを構築している。

目標として 2025 年までにスキー登山ルート 150 本、夏登山ルート 120 本、自転車（MTB を含む）ルート 120 本、カヌールート 50 本の公開していることを目指している。

すべてのルートガイドは計画から執筆まで(写真などを含む)、HokkaidoWilds.org のボランティアチーム (以下で紹介する) がプロデュースしている。ルート情報の投稿はおおよそ一週間に一本といったペースで公開している。

ルート情報を作成し公開する過程の中で特に注意を払っているのは、「日本語がわからない個人が安全に自分のレベルに合った北海道アウトドア計画を立てることができる、冒険の再現性」である。というのも、日本語のわかるアウトドア愛好者であれば、様々な参考資料及びツールが存在する。国土地理院地図（オンラインや紙地図)、山渓などの市販の登山用地形図、『北海道雪山ガイド』(北海道の山メーリングリスト, 2015) などのガイドブック、また、yamareco.com や yamap.com などといったオンラインコミュニティが存在し、山などの情報を多面的に収集し、多方向的な登山計画ができる。つまり、ある山を登ったことがない人でも、他の人が経験した冒険を、情報を十分得た上で比較的に安全に再現し挑戦することが

できる。

一方、日本語のわからない人が北海道での冒険を再現するための情報資源が極めて乏しい。それでも、ネットや口コミでの不十分な情報を元に自ら体験しようとする外国人が年々増えている。HokkaidoWilds.org ではスキー場から雪山にアクセスするルートを扱っていないのでそう言った「スキー遭難」は触れないが、真の「スキー登山遭難」（スキー場のない冬山を登りバックカントリースキーする際の遭難）に関しては日本人の遭難者が比較的に多いが、外国人の遭難者も少なからずにいることは間違いない（図 5）[3]。

本格的なアウトドアを好むできるだけ多くの外国人に北海道の素晴らしい自然を経験してもらうとともに、遭難者を増やさないことも HokkaidoWilds.org の大きな狙いである。

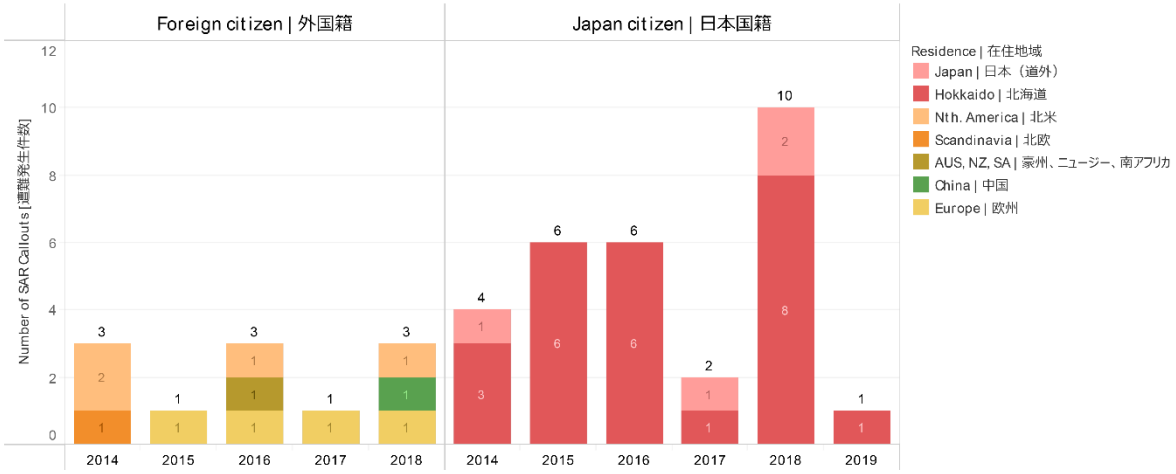
2.3.1. 無償の英語表記 PDF 地形図

英語話者が安全に北海道の登山文化を楽しむために HokkaidoWilds.org では、ルート情報を公開するだけではなく、国土地理院地図の基盤地図データを用いて印刷可能な英語表記の登山用地形図（UTM グリッド入り）や、登山者が自分の現在地を専用スマホアプリで地図上で確認できる GeoPDF を独自に開発し、無償でウェブ上で提供している（図 6）[4]。

2.3.2. 北海道の山岳地帯に関する教育コンテンツ

また、英語話者により一層北海道の自然

図 5　国籍別のスキー登山遭難者（北海道、2014～2019 年の総数）
出典：HokkaidoWilds.org (2020)



Note: Figure prepared by HokkaidoWilds.org using adapted Hokkaido Police Mountain SAR Data | 図作成者：HokkaidoWilds.org、データ出典：北海道警察山岳遭難状況（図作成者による解釈を含む）.

[3] スキー場からバックカントリーをアクセスする「スキー遭難」に関しては、数として外国人遭難者は日本人よりもわずかに多い。HokkaidoWilds.org (2020)に参照。

[4] 2019 年 11 月に東京で開催された国土交通省国土地理院主催の「GEO アクティビティコンテスト」にて、「北海道インバウンド旅行者山岳安全に向けた英語表記地形図（紙地図）の開発」をテーマに、「来場者賞」や「電子国土賞」の 2 冠の賞を受賞した。

界やアウトドア事情を理解してもらうために、定期的な北海道の気候データの分析(Thomson, 2020a)、北海道の冬山の特有のリスクとハザード(Auld & Thomson, 2018)、北海道での無線利用の法律と規制(Auld, 2019)、北海道警察の山岳遭難状況の英訳(Thomson, n.d.)、北海道でのスキー登山のマナー(Thomson, 2019a)、北海道の山小屋利用のマナー(Thomson, 2020c)、ヒグマとの共存(Siddle, 2021)、2009 年トムラウシ山遭難事件(Siddle, 2018)、大雪山での携帯トイレ利用（Thomson, 2019b）、mt-compass.com を利用した登山届のオンライン提出(Thomson, 2018)、エキノコックスや沢水の飲用(Thomson, 2020b)など、数多くのテーマで、英語話者のアウトドア愛好者の教育に向けた記事を公開している。

北海道の先住民であるアイヌ民族の、北海道への深い繋がりも、サイト内のコンテンツを通じてできる限り反映しようとしている。各ルートガイドの主要な地名（山、川、湖など）をアイヌ語でも表記するようにしている。

2.3.3.　非営利で運営

HokkaidoWilds.org は、非営利の取組である。ウェブサイトから得られるすべての収益（道内ガイドへの紹介料など）は、道内の山岳自然保全、山岳利活用の持続可能性、山岳安全などを目的とした団体へ寄付する方針である。

2.4. HokkaidoWild.org のオーディエンス

HokkaidoWilds.org の月間ユニーク訪問者数は、コロナ禍前は 8 千～10 万人程度であり（20%~40%は日本国内）、徐々に伸びていたが、コロナ禍以来はサイトアクセス数が激減した（図 7）。それでも、コロナ禍の収束（あるいはコロナウィルスとの共存が可能になった時）に向けて、インバウンド観光の復興に備えて道内の本格的なアウトドア・アクティビティを取材し公開し続けている。本ウェブサイトは、「Hokkaido backcountry skiing」、「Hokkaido bikepacking」、「Hokkaido cycle touring」、「Hokkaido hiking」、「canoeing in Hokkaido」などといったキーワードで Google 検索のトップ（上位 1 ～ 2）に表示される。

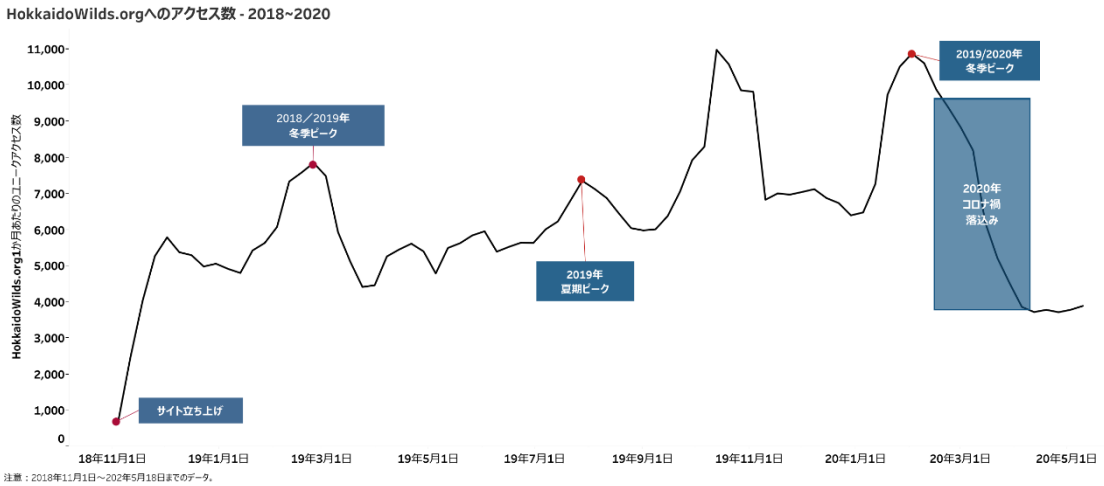


図 7　HokkaidoWilds.org ウェブサイトへのアクセス数（2018～2020 年）

2020 年度の HokkaidoWilds.org へのアクセスが 2019 年度と比べて激減しているが、HokkaidoWilds.org の Facebook ページや Instagram へのエンゲージメント（いいね率やコメント率）はむしろ増加傾向にあるため（図 8）、すでに北海道を知っているフォロワーの、北海道への興味関心がいまだに極めて高いことが読み取れるのではと解釈している。

サイト訪問者を国別にみると、4 割ほどが日本国内からアクセスしていて、2 割強が北米、1 割弱がオーストラリアやニュージーランド、西や東ヨーロッパを合わせると 2 割ほどを占めている（図 9）。ウェブサイトにどのようにたどり着いたかに関しては、6 割近くがウェブ検索から来ているので、ほとんどの訪問者は北海道の本格的なアウトドア・アクティビティに関する情報を求めてたどり着いたことが言える（図 10）。冬山コンテンツが最も閲覧されている。

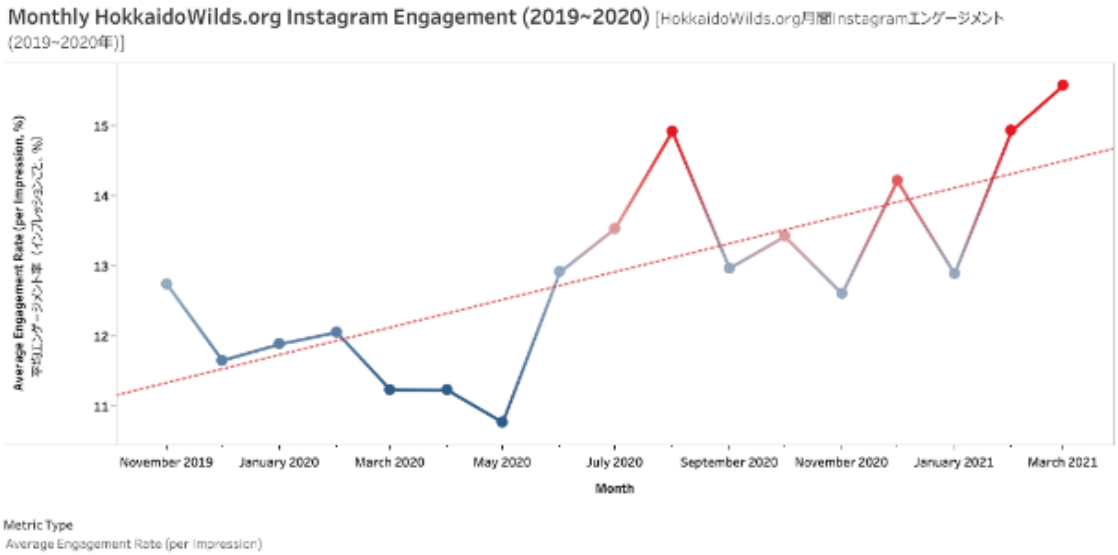


図 8　HokkaidoWilds.org インスタグラムエンゲージメント率

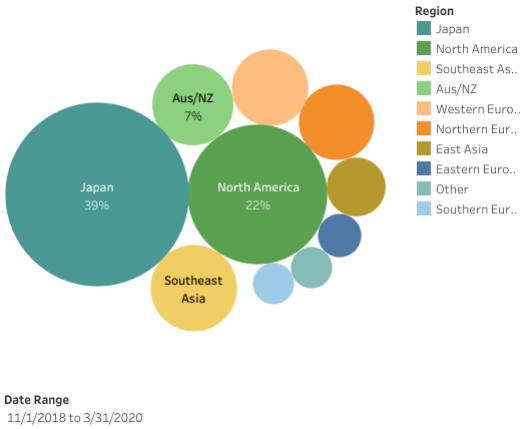


図 9　HokkaidoWilds.org
ウェブサイト訪問者（地域別）

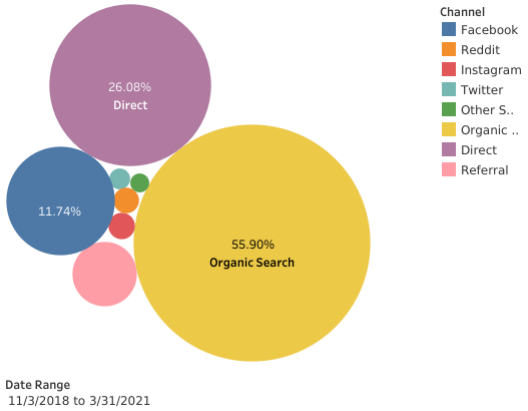


図 10　HokkaidoWilds.org
ウェブサイト訪問者（ソース別）

3.　HokkaidoWilds.org のチームについて

本サイトは国際的なチームで取材やウェブ管理をしている。

THOMSON Robert（トムソン・ロバート、男、41 歳、ニュージーランド人）は HokkaidoWilds.org を後述の妻、ヘイディ氏と一緒に創立した。合計 14 年間日本に滞在しており（北海道は 10 年間）、札幌市にある北星学園大学文学部英文学科の専任講師として勤めている（専門分野はメディア・コミュニケーション論）。HokkaidoWilds.org のウェブ開発及びルート取材（撮影、執筆など）を担当している。以前自転車でユーラシア大陸を単独で横断したほか、ギネス世界記録の保持者（スケートボードによる最長の旅―12,159km）でもある。日本語には堪能である（日本語能力試験 1 級、修士論文は日本語で執筆した）。北海道大学文学研究科修了（修士課程、博士課程）。

THOMSON Haidee （トムソン・ヘイディ、女、40 歳、ニュージーランド人）も 14 年間日本に滞在しており、私と一緒に HokkaidoWilds.org を立ち上げた。北海道は 11 年半の間住んでいて、札幌市にある北星学園大学短期大学部で専任講師として勤めている（専門分野は応用言語学）。HokkaidoWilds.org の企画や写真撮影に携わっている。日本語はほぼ支障なく使いこなせる（日本語能力試験 2 級）。

SIDDLE Richard（シドル・リチャード、男、65 歳、イギリス人）は北海道大学の元教授（リタイア中）。主に登山ルートガイドの取材を担当している。日本語にも堪能。北海道には 10 年間住んでいたが、現在はイギリス在住。

AULD Chris（オールド・クリス、男、42 歳、ニュージーランド人）は主にニセコ周辺のマウンテンバイク、スキー登山、ホワイトウォーターカヤックの取材を担当し、データ処理やウェブサイト運営にも携わっている。元ニュージーランド・ホワイトウォーター・カヤック代表。マクロソフト社アジア地域マネージャーでシンガポール在住だが、年に 10 回程度北海道を訪れている。各種のアウトドア資格を保持。蘭越町に別荘を所有。

GAN Dominika（ガン・ドミニカ、女、27 歳、ポーランド人）は HokkaidoWilds.org のグラフィックデザイン（ウェブ、ロゴなど）を担当した。ポーランド在住。

4.　北海道の登山文化を発信するにあたっての課題や問題点

北海道の自然や登山文化の魅力や、それらを発信しようとする HokkaidoWilds.org の試みについて紹介してきた。しかし、北海道の厳しい自然を、特に外国人により簡単にアクセスしてもらうことによって、実は多くの課題が生まれてくる。

4.1. オーバーユース問題

これは HokkaidoWilds.org のような小さなウェブサイトのみに帰するような問題ではない。HokkaidoWilds.org を立ち上げる前から、国立公園をはじめとした日本の自然をインバウンド観光客により強くアピールするような動きがたくさんあった。国の「国立公園満喫プロジェクト」では、2020 年までに全国の国立公園を対象に訪日外国人の国立公園利用者数を１０００万人にするという目標を立てた（環境省, 2020）。2015 年時点での 490 万人の 2 倍以上という目標で

あった。しかし、北海道の現在のインフラでは、このような利用者の増加を支え切れるのだろうか。

大雪山に関して言うと、近年は設備への投資は顕著に増えていて、ニュージーランドの登山道インフラを基準にする私にとっては、とても良い方向に進んでいると思っている。しかし、コロナ禍がある程度収束しインバウンド観光が復活する時が来たら、今のペースでの整備活動は持続できるのだろうかが心配だ。

4.1.1　冬山のオーバーユース問題

夏登山のインフラ整備の話は誰もができるし、よく話し合われていることであるが、北海道の冬のオーバーユース問題はあまり触れられていない。冬山でのレクリエーションに対する理解が乏しいせいか、遭難対応以外のトップダウン的な行政参画が甚だ乏しいこともあり、実は北海道では冬山でのオーバーユースはこの近年、場所によっては大きな問題となっている。

ここでいう「オーバーユース」は、冬山自体に人が多すぎるということを指しているわけではない。つまり、「最近、斜面や山に人が多い、特に外国人」という、時々に聞くクレームは、実は問題がないと私は思っている。北海道には立派な冬山のフィールドが多く、スキーヤーの収容能力に関しては、山自体はまだまだ余力があると考えている。

問題は、山周辺の設備であり、特に駐車場整備である。図 11 は一昨年の富良野岳冬季登山口付近である（写真提供はカミフ会上富良野冬期山岳事故防止委員会）。駐車の混み具合はまだそれほどでもないが、もっと混雑し、ひどくなることもある。図 12 はニセコ連峰のニトヌプリの冬季の登山口の状況（HokkaidoWilds.org、2020 年 1 月 18 日撮影）である。こちらもまだいいほうで、路上駐車の列が遙か遠くまで伸びることもある。

こうした路上駐車は原則交通法違反である。除雪の状況によって、道路が一車線になってしまうこともあり、除雪作業すらできないこともある。HokkaidoWilds.org をはじめとした道内の冬アウトドアを宣伝するウェブサイトや取り組みは、北海道の素晴らしい登山文化を伝える良い面もあるが、冬山利用者を増加させることによってこのような状況を悪化させることにつながるという悪い面もあるといえるであろう。

解決策はなかなか難しい。ニトヌプリ登山口に関しては、道路自体は蘭越町にあるが、訪問者の多くは倶知安町やニセコ町から来ている。蘭越町が駐車対策にお金を落としても、そのリターンは見込めるのだろうか。将来的にも、これまでのようにインバウンド（外国人）利用者の増加が続くのであれば、広域的な連携や対策が必要となり、持続可能な維持体制が必要になってくるであろう。理想的なのは有料の駐車許可制度かもしれない（McGervey, 2016; Parks Canada Agency, 2021; USDA, n.d.）。

4.2.　外国人の遭難者増加

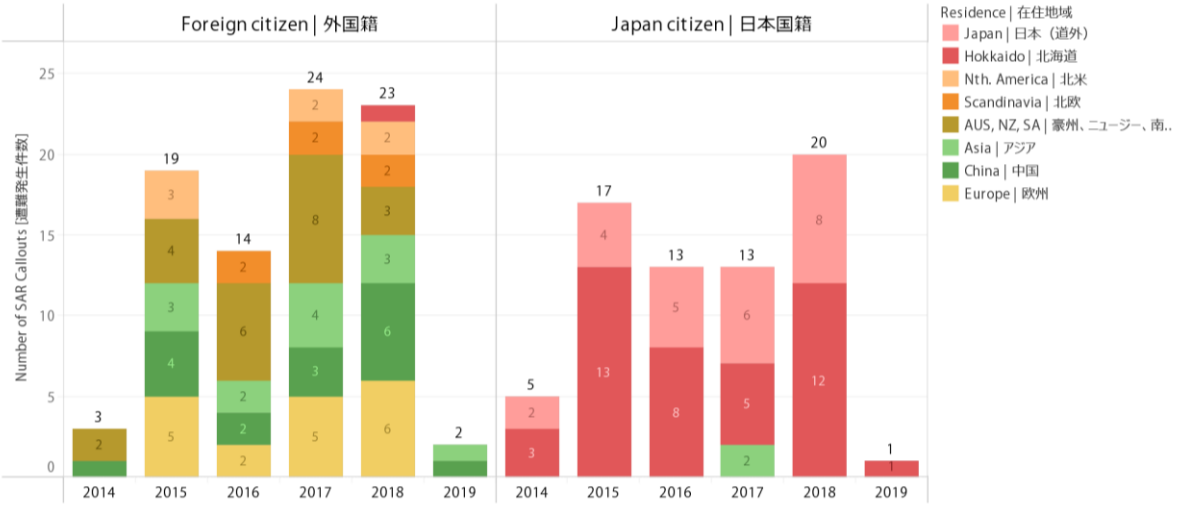
近年の報道では、外国人の冬山遭難が顕著に増えたように見える。ただし、ここで注意してもらいたいのは、遭難の分類である。北海道警察の過去 5 年間の山岳遭難統計を集計して分析してみたところ、確かにスキー場からアクセスしたバックカントリース

図 11　富良野岳の冬季バックカントリースキー登山口付近（2019 年撮影）

キー中の「スキー遭難」に関しては日本人遭難者よりも外国人遭難者が多少多い(図 13、HokkaidoWilds.org, 2020)。しかし、先述の図 5 のように、スキー場などを経由しないスキー登山中の「スキー登山遭難」に関しては、実は近年の外国人スキー登山者が増えたにもかかわらず外国人スキー登山遭難者は顕著に増えておらず、日本人スキー登山遭難者の方が依然として多い。また、冬季の「その他の山岳遭難」（冬登山など）に関し

図 12　ニトヌプリ（ニセコ連峰）冬季登山口付近の駐車問題

図 13　国籍別のスキー遭難者（北海道、2014～2019 年の総数）
出典：HokkaidoWilds.org (2020)



Note: Figure prepared by HokkaidoWilds.org using adapted Hokkaido Police Mountain SAR Data | 図作成者：HokkaidoWilds.org、データ出典：北海道警察山岳遭難状況（図作成者による解釈を含む）.

ては日本人遭難者がはるかに多い(HokkaidoWilds.org, 2020)。

いずれにしても、将来的に外国人の冬山の利用が再び増えたときに、安全な山行ができるように、北海道の特有の冬山特性を有効に伝える必要性が依然として残り、重要な課題である。

4.3.　外国人のマナー違反

私の学術的な専門領域の一つは、国や文化による人間の行動や心理傾向の差異を考察する比較文化心理学である。そこで、間違いなく言えるのは、登山文化も国によって異なる部分が存在することである(Bott, 2009; Mannell, 2005; 央二ほか, 2016)。もちろん、共通する部分が多くある。むしろ、共通するものの方が多い。日本人登山者も、外国人登山者も、自然や山への愛情は変わらない。手つかずの大自然に身を置いて、心や体をリフレッシュし、非日常的な経験をすることによって、人生を豊かにしたい。また、次世代もそのような体験ができるように、自然を守りたい。そうした自然に対する本質的な部分は変わらない。

ただし、北海道の山は特有の事情があり、トイレの問題、山小屋の利用マナー、登山中の騒音、ドローンの利用など、国によってはその「常識」が異なり、登山者間の摩擦につながることもある。HokkaidoWilds.org では、こうした「文化差」を明確にし、インバウンドの登山者に北海道の登山文化への感受性を促進するために教育的な記事を公開し努力をしている(Thomson, 2019a, 2020c)。一方、こうした常識の「文化差」が存在するからこそ、登山を通じた国際交流、異文化コミュニケーションなどが生まれ、登山を通じてむしろ国際社会が豊かになるきっかけにもなりうると考えている。

4.4.　山の商品化

北海道の山に限らない話であるが、海外のインバウンド登山者／アドベンチャートラベラーを北海道の山に迎えようとする場合に必ず出てくる話は設備の充実差である。

山の設備（登山道、山小屋、山トイレ、登山口など）は自然環境の保全、自然への効率的なアクセス、登山中の快適性や安全性など、様々な機能を果たす。ただし、人によって、各種機能への重要性の認知は異なる。ある登山者にとって、特に快適ではない山小屋であっても、それに価値を置くこともあるかもしれない。登山道が歩きにくいほど、それに挑戦する喜びも存在するかもしれない。ただ、近年、大手旅行会社や、環境省をはじめとした国の機関、インバウンド観光の振興に努める NPO や NGO などは、できるだけ多くのインバウンド観光客に国立公園や自然公園を利用してもらうように努力している。その結果として、必然的に設備の改修が必要になってくる。ただし、どこまで改善すべきなのだろうか。ニュージーランドの Milford Track のように利用者数を制限し、誰でも簡単に歩ける登山道を完備し、プロパンガスコンロ付き台所のある超快適な大型山小屋を建てる、というレベルの整備をすべきなのだろうか。こうした「山の商品化」は望ましいことなのだろうか。

自然公園と利用者満足度に関する研究では、一般の登山者にとって、歩きやすい登山道や快適な宿泊施設（山小屋やトイレ）は満足につながるということが指摘されていて（Pan & Ryan, 2007; Peterson ほか, 2018）、経済効果も示されている（Tempesta & Vecchiato, 2018）。したがって、北海道の大雪山国立公園をはじめとした人気の登山地に関しては、自然保全のための環境整備は最低限必要だが、将来的には登山者の満足度の向上という視点から環境整備についての議論や、本格的な投資も必要になってきた時代になってきていると HokkaidoWilds.org は考えている。

5.　結論

近年、世界でのアドベンチャートラベル市場は急に拡大している。各国の登山者は益々新規性のあるデスティネーションやユニークな冒険旅行を求めている。コロナ禍で現在は落込んでいるが、コロナ禍が収束するとその需要はなお強くなるであろう。その中、「クールジャパン」をキャッチフレーズに、日本の文化的財産の世界的な魅力の一つとして北海道の登山文化が注目を集め、北海道の魅力的な自然が再び世界的に関心を集める注目の的になることを期待している。

HokkaidoWilds.org では、世界的デスティネーションとしての復活を期待して、北海道の登山（冬のスキー登山、夏登山）をはじめ、道内の自転車ツーリングやカヌーツーリングルート情報を英語で発信し続けている。また、このように北海道の登山文化を発信するにあたって、英語話者が情報を十分に得た上で北海道の大自然を楽しむために、ルート情報公開だけではなく、利用者が自宅で印刷できる高精度の PDF 地形図の作成を無償で提供し、北海道の自然や登山文化を理解してもらうために多くのテーマについて英語で記事を公開している。

北海道の登山文化を発信するに当たり、解決しなければならない課題が多く残っている。北海道の登山文化を世界に発信しつつ、持続可能なものにするためには、オーバーユース問題、外国人による山岳遭難、マナー違反、「山の商品化」の程度に関してなど、北海道各地の関係者同士での議論や協議が引き続き重要である。

それらの課題を乗り越えて、日本のアドベンチャーを代表する北海道の登山文化を世界に発信しよう。

6. 参考文献

Auld, C. (2019, 7 月 11). *Two-way Radios in the Hokkaido Backcountry*. HokkaidoWilds.Org. https://hokkaidowilds.org/two-way-radios-in-the-hokkaido-backcountry

Auld, C., & Thomson, R. (2018, 8 月 1). *Keeping Safe While Ski Touring in Hokkaido*. HokkaidoWilds.Org. https://hokkaidowilds.org/keeping-safe-while-ski-touring-in-hokkaido

Bott, E. (2009). Big mountain, big name: Globalised relations of risk in Himalayan mountaineering. *Journal of Tourism and Cultural Change*, *7*(4), 287–301. https://doi.org/10.1080/14766820903521785

Green, H. S. (2015). The Soft Power of Cool: Economy, Culture and Foreign Policy in Japan. 東洋法学, *3*, 242–221.

HokkaidoWilds.org. (2020, 2 月 12). *北海道山岳遭難データを分析してみた（2014 年～2019）*. HokkaidoWilds.Org. https://hokkaidowilds.org/ja-hokkaido-winter-search-and-rescue-trends-2014-2019

Mannell, R. C. (2005). Evolution of Cross-Cultural Analysis in the Study of Leisure: Commentary on "Culture, Self-Construal, and Leisure Theory and Practice". *Journal of Leisure Research*, *37*(1), 100–105. https://doi.org/10.1080/00222216.2005.11950042

McGervey, P. (2016). Two decades of a winter backcountry permit—Is this the 「right」 tool to encourage awareness, education and responsibility? *Proceedings*. ISSW16 - International Snow Science Workshop, Breckenridge, Colorado. https://arc.lib.montana.edu/snow-science/objects/ISSW16_P3.40.pdf

Pan, S., & Ryan, C. (2007). Mountain Areas and Visitor Usage–Motivations and Determinants of Satisfaction: The Case of Pirongia Forest Park, New Zealand. *Journal of Sustainable Tourism*, *15*(3), 288–308. https://doi.org/10.2167/jost662.0

Parks Canada Agency. (2021, 5 月 7). *Ski touring Rogers Pass with the Winter Permit System—Winter*. https://www.pc.gc.ca/en/pn-np/bc/glacier/visit/hiver-winter/ski

Peterson, B. A., Brownlee, M. T. J., & Marion, J. L. (2018). Mapping the relationships between trail conditions and experiential elements of long-distance hiking. *Landscape and Urban Planning*, *180*, 60–75. https://doi.org/10.1016/j.landurbplan.2018.06.010

Siddle, R. (2018, 12 月 5). *The Mt. Tomuraushi Incident*. HokkaidoWilds.Org. https://hokkaidowilds.org/the-mt-tomuraushi-incident

Siddle, R. (2021, 7 月 20). *Bear encounters increasing in Hokkaido—Should hikers be worried?* HokkaidoWilds.Org. https://hokkaidowilds.org/bear-encounters-increasing-in-hokkaido-should-hikers-be-worried

SkiAsia.com. (2021, 8 月 25). *Ski Asia readers reveal where they're planning to ski next*. Ski Asia. https://skiasia.com/news/most-popular-japanese-ski-resorts/

Tempesta, T., & Vecchiato, D. (2018). The Value of a Properly Maintained Hiking Trail Network and a Traditional Landscape for Mountain Recreation in the Dolomites. *Resources*, *7*(4), 86. https://doi.org/10.3390/resources7040086

Thomson, R. (2018, 2 月 27). *Notifying Police of Backcountry and Hiking Plans in Japan on the Web*. HokkaidoWilds.Org. https://hokkaidowilds.org/online-notification-police-backcountry-plans-japan

Thomson, R. (2019a, 2 月 4). *Hokkaido Ski Touring Etiquette*. HokkaidoWilds.Org. https://hokkaidowilds.org/hokkaido-ski-touring-etiquette

Thomson, R. (2019b, 5 月 6). *Pooping in the Hokkaido Outdoors*. HokkaidoWilds.Org. https://hokkaidowilds.org/pooping-in-the-hokkaido-outdoors

Thomson, R. (2020a, 5 月 17). *Hokkaido 2019/2020 Winter Snowfall and Snowpack Statistics*. HokkaidoWilds.Org. https://hokkaidowilds.org/hokkaido-2019-2020-winter-snowfall-and-snowpack-statistics

Thomson, R. (2020b, 6 月 11). *Echinococcosis, foxes, and drinking from streams in the Hokkaido outdoors*. HokkaidoWilds.Org. https://hokkaidowilds.org/echinococcosis-foxes-and-drinking-from-streams-in-the-hokkaido-outdoors

Thomson, R. (2020c, 9 月 11). *Hokkaido Backcountry Hut Etiquette: A 12-point guide*. HokkaidoWilds.Org. https://hokkaidowilds.org/hokkaido-backcountry-hut-etiquette

Thomson, R. (n.d.). *Hokkaido Search and Rescue Incidents*. HokkaidoWilds.Org. https://hokkaidowilds.org/sar-incidents

USDA. (n.d.). *Willamette National Forest—Know Before You Go in Winter*. https://www.fs.usda.gov/detail/willamette/recreation/?cid=stelprdb5108580

央二伊藤，志郎山口，功岡安，薫北村, & Walker, G. J. (2016). 青年の野外レクリエーションの参加動機と阻害要因が野外レクリエーション参加に与える影響：日本とカナダの文化的類似・相違点の比較検討. 体育学研究, *61*(1), 11–27. https://doi.org/10.5432/jjpehss.15026

環境省. (2020). 環境省_国立公園満喫プロジェクト. http://www.env.go.jp/nature/mankitsu-project/

経済産業省. (2018). *北海道東川町基本計画*. https://www.meti.go.jp/policy/sme_chiiki/miraitoushi/kihonkeikaku/hokkaidou-higashikawacho.pdf

大雪山国立公園連絡協議会. (2020). *まもり、活かし、つなげようみんなでつくる、世界を魅了する大雪山国立公園*（大雪山国立公園ビジョン）. http://www.daisetsuzan.or.jp/wp-content/uploads/2021/02/01_vision.pdf

内閣府. (2019). *クールジャパン戦略*. 内閣府知的財産戦略本部. https://www.cao.go.jp/cool_japan/about/pdf/190903_cjstrategy.pdf

内閣府. (n.d.). クールジャパン戦略. *Japan. Cool Japan.* https://www.cao.go.jp/cool_japan/about/about.html

北海道インバウンド研究会. (2018). 北海道インバウンド・インフォ. http://inbound-jp.info/

北海道の山メーリングリスト（編）. (2015). *北海道雪山ガイド*（最新 edition）. 北海道新聞社.

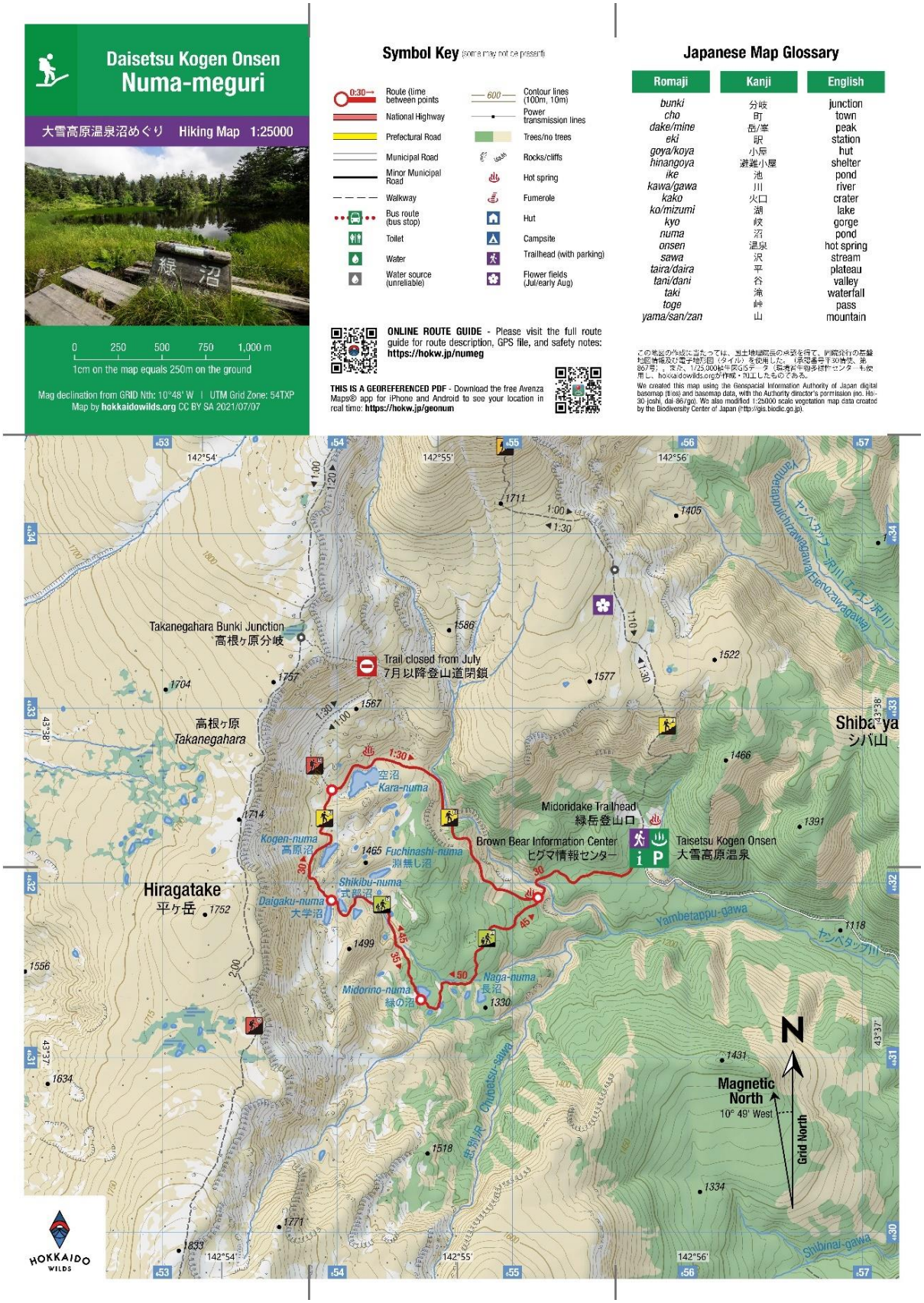


図 6　HokkaidoWilds.org が自作する UTM グリッド入り英語表記登山用地形図の例